

點頭錄

夏目漱石

青空文庫

また正月が来た。振り返ると過去が丸で夢のやうに見える。何時の間に斯う年齢を取つたものか不思議な位である。

此感じをもう少し強めると、過去は夢としてさへ存在しなくなる。全くの無になつてしまふ。實際近頃の私は時々たゞの無として自分の過去を観ずる事がしばゝある。いつぞや上野へ展覧会を見に行つた時、公園の森の下を歩きながら、自分は或目的をもつて先刻から足を運ばせてゐるにも拘はらず、未だ曾て一寸も動いてゐないのだと考へたりした。是は耄碌の結果ではない。宅

を出て、電車に乗つて、山下で降りて、それから靴で大地の上をしかと踏んだといふ記憶を慥かに有つた上の感じなのである。自分はそのとき時終日行いて未だ曾て行かずといふ句が何処かにあるやうな気がした。さうして其句の意味は斯ういふ心持を表現したものではなからうかとさへ思つた。

これをもつと六づかしい哲学的な言葉で云ふと、畢竟ずるに過去は一の仮象に過ぎないといふ事にもなる。金剛經にある過去心は不可得なりといふ意義にも通ずるかも知れない。さうして当来の念々は悉く刹那の現在からすぐ過去に流れ込むものであるから、又瞬間の現在から何等の段落なしに未来を生み出すものであるから、過去に就て云ひ得べき事は現在に就ても言ひ得

べき道理であり、また未来に就いても下し得べき理窟であるとすると、一生は終に夢よりも不確実なものになつてしまはなければならない。

斯ういふ見地から我といふものを解釈したら、いくら正月が来ても、自分は決して年齢を取る筈がないのである。年齢を取るやうに見えるのは、全く暦と鏡の仕業で、其暦も鏡も実は無に等しいのである。

驚くべき事は、これと同時に、現在の我が天地を蔽ひ尽して儼然存してゐるといふ確実な事実である。一挙手一投足の末に至る迄此「我」が認識しつゝ絶えず過去へ繰越してゐるといふ動かしがたい真境である。だから其処に眼を付けて自分の後を振り

返ると、過去は夢所^{どころ}ではない。炳乎^{へいこ}として明らかに刻下^{こくか}の我^{てら}を照しつゝある探照燈のやうなものである。従つて正月が来るたびに、自分は矢張り世間並^{なみ}に年齢^{とし}を取つて老い朽ちて行かなければならなくなる。

生活に対する此^{この}二つの見方が、同時にしかも矛盾なしに両存して、普通にいふ所の論理を超越してゐる異様な現象に就^ついて、自分は今何も説明する積^{つも}はない。又解剖する手腕^もも有たない。たゞ年頭に際して、自分は此^{この}一体二様の見解を抱いて、わが全生活を、大正五年の潮流に任^ませる覚悟をした迄である。

若^もし無に即して云^いへば、自分は今度の春を迎へる必要も何もない。否^{いな}明治の始めから生れないのと同じやうなものである。然^{しか}し

有になづんで云へば、多病な身体が又一年生き延びるにつれて、自分の為すべき事はそれ丈量に於て増すのみならず、質に於ても幾分か改良されないと限らない。従つて天が自分に又一年の寿命を借して呉れた事は、平常から時間の欠乏を感じてゐる自分に取つては、何の位の幸福になるか分らない。自分は出来る丈余命のあらん限りを最善に利用したいと心掛けてゐる。

趙州和尚といふ有名な唐の坊さんは、趙州古仏晚年発心と人に云はれた丈あつて、六十一になつてから初めて道に志した奇特な心懸の人である。七歳の童児なりとも、我に勝るものには我れ即ち彼に問はん、百歳の老翁なりとも我に及ばざる者には我れ即ち侘を教へんと云つて、南泉といふ禪坊さんの所へ行つて

二十年間倦^うまずに修業を継続したのだから、卒業した時にはもう八十になつてしまつたのである。夫^{それ}から趙州の観音院に移つて、始めて人を得度^{とくど}し出した。さうして百二十の高齡に至る迄^{けだう}化導を専^{もつぱ}らにした。

寿命は自分の極めるものでないから、固^{もと}より予測は出来ない。

自分は多病だけれども、趙州の初^{しよほつしん}発心の時よりもまだ十年も若い。たとひ百二十迄^{まで}生きないにしても、力の続く間、努力すれば

まだ少しは何か出来る様に思ふ。それで私は天寿の許す限り趙州の顰^{ひそみ}にならつて奮励する心^{こゝろくみ}組である。古仏と云^いはれた人の真^ま

似^ねも長命も、無論自分の分^{ぶん}でないかも知れないけれども、羸^{るゐじや}

弱^くなら羸^{るゐじやく}弱^{やく}なりに、現にわが眼前に開展する月日に対して、

あらゆる意味に於^{おい}ての感謝の意を致して、自己の天分の有^あり丈^{たけ}を
 尽さうと思ふのである。

自分は点頭録^{てんとうろく}の最初に是^{これだけ}丈の事を云つて置かないと気が済
 まなくなつた。

二 軍国主義（一）

今度の欧^{おう}洲^{しゅう}戦争が爆発した当時、自分は或^{ある}人^{ひと}から突然質問
 を掛けられた。

「何^どんな影響が出て来るでせう」

「左^さ様^{やう}」

自分は實際考へる暇ひまを有たなかつた。けれども答へなければならなかつた。

「何どんな影響が出て来るか、来て見なければ無論解りませんけれども、何しろ吾々が是これはと驚ろくやうな目覚めざましい結果は予期しにくいやうに思ひます。元來事ことの起りが宗教にも道義にも乃至ないし一般人類に共通な深い根柢を有した思想なり感情なり欲求なりに動かされたものでない以上、何方どつちが勝つた所で、善が栄えるといふわけでもなし、又何方どつちが負けたにした所で、真しんが勢いきほひを失ふといふ事にもならず、美かゞやきが輝を減ずるといふ羽目はめにも陥る危険はないぢやありませんか」

自分はさう云いひ切つて仕舞しまつた。さうして戦争の展開する場面

が非常に広い割に、又それに要する破壊的動力が凄じい位猛烈な割に、案外落付いてゐられるのは、全く此見解が知らずく胸の裡にあるからだらうと、私かに自分で自分を判断した。

實際此戦争から人間の信仰に革命を引き起すやうな結果は出て来やうとも思はれない。又従来の倫理觀を一變するやうな段落が生じやうとも考へられない。これが為に美醜の標準に狂ひが出やうとは猶更懸念できない。何の方面から見ても、吾々の精神生活が急劇な変化を受けて、所謂文明なるものゝ本流に、強い角度の方向轉換が行はれる虞はないのである。

戦争と名のつくものゝ多くは古来から大抵斯んなものかも知れないが、ことに今度の戦争は、其仕懸の空前に大袈裟な丈に、やゝ

ともすると深みの足りない裏面を対照として却て思ひ出させる丈である。自分は常にあの弾丸とあの硝薬せうやくとあの毒瓦斯ガスとそれからあの肉団にくだんと鮮血とが、我々人類の未来の運命に、何の位の貢獻をしてゐるのだらうかと考へる。さうして或る時は氣の毒になる。或る時は悲しくなる。又或る時は馬鹿々々しくなる。最後に折々をりくは滑稽さへ感ずる場合もあるといふ残酷な事実を自白せざるを得ない。左様さうした立場から眺めると、如何いかに凄じすさまい光景でも、如何に腥なまぐさい舞台でも、それに相応した内面的背景を具へて居ないといふ点に於て、又それに比例した強硬な脊髓を有して居ないといふ意味に於て、浅薄な活動写真だの軽浮けいふなセンサーシヨナル小説だのと扱えらぶ所がないやうな氣になる。たとひ殺傷に参加す

る人々個々の頭上には、千差万別の悲劇が錯綜紛糾さくそうふんきうして、時々刻々に彼等の運命を変化しつゝあらうとも、それは当座限りの影響に過ぎない。永久に吾人一般の内面生活を変色させるやうな強い結果は何処どこから生れて来ない。とすると、今度の戦争は有史以来特筆大書すべき深刻な事実であると共に、まことに根の張らない見掛倒しの空々そら／＼しい事実なのである。（つゞく）

三 軍国主義（二）

然ししかもう少し低い見地に立つて、もつと手近な所を眺めると、此戦争このの当然将来に齎もたらすべき結果は、いくらでも吾々の視線の中うち

に這入^{はひ}つて来なければならぬ。政治上にせよ、經濟上にせよ、向後解決^{かうご}されべき諸問題は何の位^{どくらゐ}彼等の前に横^{よこた}はつてゐるか分らないと云^いつても好^いい位である。

其^{そのうち}中で事件の当初から最も自分の興味を惹^ひいたもの、又現に惹きつゝあるものは、軍國主義の未來といふ問題に外ならなかつた。人道の爲の争ひとも、信仰の爲の闘ひとも、又意義ある文明の爲の衝突とも見^み做^なす事の出来ない此^{この}砲火の響を、自分はたゞ軍國主義の発現として考へるより外に翻譯の仕様がなかつたからである。歐洲大乱といふ複雑極まる混乱した現象を、斯^かう驚^{わしづ}攫^{かみ}に纏めて觀察した時、自分は始めて此^{この}戦争に或^{ある}意味を附着する事が出来た。さうして重^{おも}に其^{その}意味からばかり勝敗の成^{なり}行^{ゆき}を眺める

やうになつた。従つて個人としての同情や反感を度外に置くと、
 独逸ドイツだの仏蘭西フランスだの英吉利イギリスだのといふ国名は、自分に取つてもう
 重要な言葉でも何でもなくなつて仕舞しまつた。自分は軍国主義を標へ
 ううばう
 榜ぼうする独逸が、何どの位の程度に於おいて聯合國を打ち破り得るか、
 又何どれ程根強ほどくそれらに抵抗し得るかを興味に充みちた眼で見詰め
 るよりは、遥はるかにより鋭い神経を働かせつつ、独逸に因よつて代表さ
 れた軍国主義が、多年英えい仏ふつに於て培養された個人の自由を破壊
 し去るだらうかを觀望してゐるのである。国土や領域ラテンや羅甸民族
 やチウトン人種すべや凡て具象的な事項は、今の自分に左さした問題に
 なつてゐない。

独逸は当初の予期に反して頗すこぶる強い。聯合軍に対して是これほど程持

ち^{こた}応へやうとは誰しも思つてゐなかつた位に強い。すると勝負の上^{おい}に於て、所^{いはゆる}謂軍国主義なるものゝ価値は、もう大分^{だいぶん}世界各国に認められたと云^いはなければならぬ。さうして向後^{かうご}独逸が成功を収めれば収める程、此^{この}価値は漸^{ぜん}々高まる丈である。英吉利のやうに個人の自由を重んずる国が、強制徴兵案を議會に提出するのみならず、それが百五対四百三の大多数を以て第一^{どくくわい}讀^よ會^{かい}を通過したのを見ても、其^{その}消息はよく窺^{うかが}はれるだらう。

かつてギツシングの書いたものを読んだら、小さいうち学校で体操を強ひられるのが、非常の苦痛と不快を彼に与へたといふ事が精^{くは}しく述べてあつた末に、もしわが英国で本人の意思に逆つて迄も徴兵を強制するやうになつたと仮定したら、自分は何^どんな心

持になるだらう、さういふ事實は万々起る筈はずはないのだけれども、たゞ想像して見てさへ堪たへられないと附け加へてあつた。ギツシングのやうに独居どくきよを好む人は特別だと云いふかも知れないが、英國人の自由を愛する念と云つたら、殆ど第二ほとんの天性として一般に行き渡つてゐるのだから、強制徴兵に対する嫌惡の情は、誰しもギツシングに譲らないと見ても間違はないのである。其英國そので無理にも國民を兵籍に入れやうとするのには至大しだいの困難があると思はなければならぬ。其困難を冒をかして新しい議案が持ち出され、又其議案が過半の多数に因よつて通過されたとすると、現に非常な変化が英國民の頭の中うちに起りつつある証拠になる。さうして此變この化は既に独逸が真向まつかうに振り翳かざしてゐる軍國主義の勝利と見るよ

り外に仕方がない。戦争がまだ片付かないうちに、英国は精神的にもう独逸に負けたと評しても好い位のものである。（つゞく）

四 軍国主義（三）

開戦の劈頭へきとうから首都巴里パリを脅おびやかされやうとした仏蘭西人フランスの腦裏には英国民よりも遙はるかに深く此軍国主義このの影響が刻み付けられたに違ない。たゞでさへ何どうして独逸ドイツに復讐いよくしてやらうかと考へ続けに考へて来た彼等が、愈いよくとなると、却かへつて其独逸の為に領土の一部分を蹂躪じゅうりんされるばかりか、政庁さへ遠い所へ移さなければならなくなつたのは、彼等に取つて甚はなはだ痛ましい事実である。其事その

実を眼前に見た彼等の精神に、一種の強い感銘が起るのも亦必然の結果と云はなければなるまい。飛行船から投下された爆弾以外に、まだ寸土も敵兵に踏まれてゐない英国に比較すると、此精神の打撃は更に幾倍の深刻さを加へてゐると見るのが正に妥当の見解である。

不幸にして強制徴兵案の様に自分の想像を事実の上で直接確めて呉れる程の鮮やかな現象が、仏蘭西ではまだ起つてゐないから、自分は自分の臆説をさう手際よく實際に証明する訳に行かない。けれども戦争の経過につれて、彼等の公表する思想なり言説なりに現れて来る変化を迹付けければ、自分の考への大して正鵠を失つてゐない事丈は略慥なやうに思はれる。此間或雑誌で「力

といふ觀念に就て独仏両者を比較したパラントといふ人の文章を読んだ時、自分は益其感を深くした。

彼は「力」といふ考への中に、独逸人の混入した不純な概念を列挙した末、仏蘭西のそれも矢張り變に歪んでしまつたといふ事を下の様に説いてゐる。

「仏蘭西では科学的に所謂「力」といふものが正義権利の觀念と衝突した。ルーテル式独逸式ではないが、ルソー式、トルストイ式、四海同胞式、平和式、平等式、人道式なる此觀念のために本来の「力」といふ考へがつい曲げられて不徳不仁の属性を帯びるやうになつてしまつた。そこで正義と人道と平和の為に此「力」といふものを輕蔑し且否定しなければならなくなつた。さ

うして美と正義を一致させ、美と調和を一致させる美学を建設した。奮闘も差別も自然の法則であるといふ事を忘れた。美其物そのものも一種の「力」であり、又「力」の発現であるといふ事を忘れた。正義其物そのものも本来の意味から云へば平衡を得た「力」に過ぎないといふ事を忘れた。「力」の方が原始的で、正義の方は却て転来い的であるといふ事も忘れた。斯こんな僻見へきけんに比べると二ーチエの方が何どの位尤もつともであつたか分らない。……そこで吾々は何どうしても「力」といふ觀念をこゝで一新する必要がある。さうして本当の意味でもう一度それを評価の階段中に入れ易かへなければならぬ。自然の法則を現すといふ点に於おいて「力」は科学的なものである。勝利を冀こひねがふ人間の精神を現すといふ点に於て「力」は高

尚なものである。吾々はもう權利と「力」とを対立させる事を已めなければ行けない。權利がなくつて負けるのはまだしもだが、權利がある上に負けるのは二重の敗北である。最大の損害である。無上の不幸である」

冗漫と難澁とを恐れて、わざと大意だけを抄訳した此この一節を読んで、相手の軍国主義が何んな風どに仏蘭西の思想界の一部に食ひ入りつゝあるかが解るだらう。(つゞく)

五 軍国主義 (四)

すると戦争のまだ落着しないうちから、年来独逸ドイツによつて標へうば

傍^うされた軍国的精神なるものは既に敵国を動かし始めたのである。遠い東の果^{はて}に住んでゐる吾々の視聴^{くわん}を刺戟する位強く彼等の心を動かし始めたのである。さうして此^{この}影響はたとひ今度の戦争が片付いても、容易に彼等の脳裏から拭^{ぬぐ}ひ去る事が出来ないのである。単に過去の経験を痛切に記憶すべく余儀なくされた結果として拭^{ぬぐ}ひ去る事が出来ないばかりでなく、未来に対する配慮からしても到底此^{この}影響を超越する訳^{わけ}には行かないのである。

待^{たい}対^{たい}世界^{かい}の凡^{すべ}てのものが悉く条件つきで其^{その}存在を許されてゐる以上、向後^{かうご}に回復されべき歐洲の平和にも、亦絶対^{また}の權威が伴つてゐない事だけは誰の眼にも明かである。然^{しか}し彼等^そが其^{その}平和の必要条件として、それとは全く両立しがたい腕力の二字を常に念

頭に置くべく強しひられるに至つては、彼等と雖いへども今更ながら天のアイロニーに驚かざるを得まい。現代に所いはゆる謂列強の平和とはつまり腕力の平均に外ならないといふ平凡な理窟を彼等は又新しく天から教へられたのである。土俵の真中で四つに組んで動かない力士は、外觀上至極平和さうに見える。今迄彼等の享きやう有いうした平和も、実はそれ程に高価で、又それ程に苦痛性を帯びてゐたのである。しかも彼等は相撲取のやうにそれを自覺してゐなかつたために突然罰せられた。換言すれば生存上腕力の必要を向後かうご当分の間忘れる事の出来ないやうに遣付やつけられた。軍国主義が今迄彼等に及ぼした、又是これから先彼等に及ぼすべき影響は決して浅いものではない。又短いものではなからう。

プロシヤ

普魯西人は文明の敵だと叫んで見たり、独逸人ドイツが傍そばにゐると食

つた物が消化こなれないで困ると云いつたりした二ーチエは、偉大なる

「力」の主張者であつた。不思議にも彼の力説した議論の一面を、

彼の最も忌いみ悪にくんだ独逸人が、今政治的に又國際的に、実行して

ゐるのである。さうして成効してゐるのである。軍国主義の精神

には一時的以上の真理が何処どこかに伏在ふくざいしてゐると認めても差さしつ

支かへないかも知れない。

しか

然し自分の軍国主義に対する興味は、此処迄觀察して来ると其そ

処こで消えてしまはなければならない。自分はこれ以上同じ問題に

就ついて考へる必要を認めない。又手数いとも厭いとはしい気がする。自分

はもつと高い場所に上りのぼりたくなる。もつと広い眼界から人間を眺

めたくなる。さうして今独逸ドイツを縦横に且かつ寧猛だうまうに活躍させてゐる
 この此軍国主義なるものを、もつと遠距離から、もつと小さく觀察し
 たい。

将来に於ける人間の生存上赤裸々せきらゝゝなる腕力の発現が、大仕掛おほじかけ
 の準備、即ち戦争すなはといふ形式を以て世の中に起るとすれば、それ
 を解釈するものは、腕力の発現そのものが目的で人間が戦争をす
 るのであるとするか、又は目的は他たにあるが、それを遂行すゐかうする
 手段として已やむを得ず戦争に訴へたのだとしなければならぬ。然しか
 し戦争其そのもの物が面白くつて戦争をしたものが昔からあるだらうか。
 ナポレオンの様な此方面このの天才ですら、夜打朝懸ようちあさがけ、軍さの懸いく
 引ひきに興味は有もつてゐたかも知れないが、たゞ戦ひたいから戦つ

たのだとは受け取れない。たとひ露骨な腕力沙汰が個人の本能だとしても、相手を殺したり傷けたりしない程度に於て其本能を満足させるのが人情である。一日に何千何万といふ人命を賭にして此本能に飽満はうまんの悦樂を与へるのが戦争であるとは、誰しも云ひ得まい。すると戦争は戦争の為の戦争ではなくつて、他に何等かの目的がなくてはならない、畢ひつぎやう竟ずるに一の手段に過ぎないといふ事に帰着してしまふ。

何れの方面から見ても手段は目的以下のものである。目的よりも低級なものである。人間の目的が平和にあらうとも、芸術にあらうとも、信仰にあらうとも、知識にあらうとも、それを今批判する余裕はないが、とにかく戦争が手段である以上、人間の目的

でない以上、それに成効の実力を付与する軍国主義なるものも亦決して活力評価表の上に於て、決して上位を占むべきものでない事は明かである。

自分は独逸によつて今日迄鼓吹こすゐされた軍国的精神が、其敵国たる英仏に多大の影響を与へた事を優いに認めると同時に、此時代錯誤的精神が、自由と平和を愛する彼等に斯かく多大の影響を与へた事を悲しむものである。

六 トライチケ（一）

歐洲戦争が起つてから、
独（ドイツ）乙の学者思想家の言論を實際的

に解釈するものが続々出て来た。

最初英吉利〔イギリス〕の雑誌にはニーチエといふ名前が頻しきりに見えた。二

ーチエは今度の事件が起る十年も前、既に英語に翻訳されてゐる。

英吉利の思想界にあつて別に新あたらしい名前でもない。然し彼等は

其名前〔その〕に特別な新あたらしい意味を着つけた。さうして彼の思想を此大〔この〕

戦争の影響者である如くに言ひ出した。是は誰の眼めにも映うつる程屡

繰かへり返された。基〔キリスト〕督の道德は奴隷どれいの道德であると罵つたのは

正にニーチエであると同時に、ビスマークを憎みトライチケを侮

つたのもニーチエであるとする、彼が斯〔こ〕ういふ解釈を受けて満

足するかどうかは疑問である。本人の思〔い〕はく如何〔い〕は別問題として、

彼の唱道した超人主義の哲学が、此際独〔ドイツ〕乙〔ドイツ〕に取つて、何れ程

役に立つてゐるかも遠方に生れた自分には殆んど見当が付かない。

〔フランス〕

仏蘭西の一批評家は「所謂独乙的發展」^{〔いわゆる〕}といふ題目の下に、^{した}へ

ーゲルとビスマークとキリアム二世の名を列举した。彼はヘーゲルの様な純粹の哲学者を軍人政治家と結び付ける許りか、其思想が彼等軍人政治家の実行に深い關係を有してゐるのだといふ事を^{こと}説明しやうと試みた。彼の云ふ所によると、普魯西^{〔プロシア〕}の軍国主義はヘーゲルの觀念論の結果に外ならんといふのである。——元來独

乙のアイディアリズムは觀念の科学であつて、其觀念なるものが又大いに感情的分子を^{ふく}含んでゐる。文字の示現通り單なる冥想や思索でなくつて、場合が許すならば、何時^{いつ}でも実行的に變化するのみならず、時としては侵略的にさへなりかねない程^{〔ほど〕}毒々しいもの

である。アイチアリズムが論議の援助を受けて、主観客観の一致を発見したが最後、こゝに外界と内界の 牆〔しょうへき〕 壁を破壊して、凡てを吸収し尽さなければ已〔や〕まない事〔こと〕になる。アイチアリズムから思ひも寄らない物質主義が現はれてくる。是は最初から無関心で出立しない哲学として、陥るべき当然の結果である。

此批評家の云ふ事〔こと〕が、果して真相の解釈であるか何〔ど〕うか、是も自分には分らない。唯遠くにゐて、其土地の空気を呼吸しない所〔せ〕為〔ゐ〕か、斯〔か〕ういふ説明は自分から見て何〔ど〕うも切実でないやうな気がする。奇抜〔こと〕な事は突〔とつ〕飛〔び〕な位奇抜とは思ふが、それがため却つて成程と首肯しがたくなる位なものである。

例を挙げればまだ沢山あるが、さう一々も覚えてゐないから、

まづ此位にして置いて、自分は一寸斯ういふ現象に就いてこゝに挿話的ながら考へて見たいと思ふ事がある。

英仏の評論家は現在の戦争を単に当面の事実としてばかり眺めてゐないのみならず、又それを政治上の問題としてばかり考へてゐないのみならず、其背後に必ず或思想家なり学者なりの言説を大いなる因子として数へたがつてゐる傾向に見える。實際歐洲の思想家や学者はそれ程実社会を動かしてゐるのだらうか。

自分は日露戦争が、我日本の生んだ大哲学者の影響を蒙つて発現したとは決して思はない。日清戦争も其通りである。戦争はとにかく、其他の小事件にせよ、我日本に起つた歴史的事実の背景に、思想家の思想を基点として据ゑ得るものは殆んどないやうに

思ふ。現代の日本に在つて政治は飽く迄も政治である。思想は又何^{〔どこ〕}所迄も思想である。二つのものは同じ社会にあつて、てんでんばら／＼に孤立してゐる。さうして相互の間に何等の理解も交渉もない。たまに両者の連鎖を見出すかと思ふと、それは発売禁止の形式に於て起る抑圧的なものばかりである。山陽の日本外史が維新の大業に醗酵分となつて交り込んだのは、例外中の例外で、しかもそれは明治大正以前の事実に過ぎない。日本の思想家が貧弱なのだらうか。日本の政治家の眼界が狭いのだらうか。又は西洋の批評家の解釈に誇張が多過ぎるのだらうか。自分は三つとも否定する訳に行くまいと思ふ。さうして其内で西洋の批評家の誇張が一番少ないと思ふ。（つゞく）

七 トライチケ（二）

もしトライチケの名がニーチエやヘーゲルと同じ意味に於て此戦争の引合ひきあひに出るならば、自分は少なくとも是丈「これだけ」ことあたまの事を頭のうちにに入れて置く方が便利だと考へる。さうすれば大した困難と誤解なしに、現下独「ドイツ」乙に於る彼の地位が、比較的明瞭に想像され得るからである。

ニーチエやヘーゲルは此事件後に復活した名前ではない。只在来の名前に英仏人あたが新らしい意義を付けた丈である。疾とうから知れてゐる彼等の内容を、一種の刺戟に充ちた異様の眼めで、特別に

眺めた丈である。トライチケも復活した名でないかも知れない。けれども前者と違つて、此「このさい」際新らしい解釈を受ける必要のない名である。今迄のトライチケを今迄通りに見てゐれば、視線の角度を改める必要も手数も要らないで、すぐ彼と今度の戦争との関係が解るのである。彼の説はニーチ工程高踏的でなかつた。孤峰頂上から下界へ向つて命令するが如き態度で、詩のやうな哲学、又哲学のやうな詩を絶叫しはしなかつた。無論ヘーゲル程神秘の雲くものうちに隠れて弁証の稲妻を双手に弄する人ではなかつた。彼は最初から確實に地上を歩あるいてゐた。のみならず彼の眼界は狭い独「ドイツ」乙によつて東西南北共に仕切られてゐた。従つて今更新らしく彼を翻訳する必要もなければ又しやうとした所で其余地もな

いのである。たゞ当時の彼を当時の儘引き延ばして、今の戦争に連続させさへすれば、それで両者の関係は可なり判然するのである。自分はわざと両者の関係と云つた。実は彼が今次の大戦争に及ぼした影響と云ひたいのであるが、それはニーチエやヘーゲルの場合と同じく、影響の程度からいつて、自分には能く解らないから、仕方なしにさういふ言葉遣ひを遠慮した。しかも其上に前述べた通り、彼^{〔ひ〕}我國情の差違^{〔さあなら〕}並びに批評家の誇張などを念頭に置いて、是からトライチケを一瞥しやうとするのである。

千八百三十四年ドレスデンに生れた彼は、父が軍籍に在つた関係から云つても、母が士官の娘であつた因縁から見ても、兵士たるべき運命を有^{〔も〕}つて生れたと同じ事^{〔こと〕}であつた。小供の時、疱瘡に

罹つたのと、それに引き続いて耳の病氣に冒されたので、幸か不幸か、彼は彼の既定ていの行路を全然見捨てなければならなくなつた。然し十四位くらいから彼の父に送る手紙の中には、もう政治上の意見などがちらほら散見し始めたさうである。さうして十六になるかならない内うちに、彼はいつの間まにか熱烈なる独乙統一論者になつて仕舞つた。無論普魯西プロシアを盟主としなければならぬといふのが、彼の当初からの主張であつた。彼がライプツヒに遊学した頃、教授の講義は碌ろくに聴きもせず、手当り次第に一人ぼつちの乱読をほしいまとき恣しまにした時ですら、書物から得る凡ての知識は、みな此普魯西中心の国家といふ大理想を構成する為ために利用されたのである。

彼はマキアエルを読んだ。正義だらうが道德だらうが、国家の

為ならば、何時いつ犠牲に供しても差支さしかえないものだといふ信念を抱くやうになつた。專政だらうが压制だらうが、苟いやくも国家の統一を維持し、又国家の威力を増進する以上は、いくら何どう用ひても構はないものだといふ決論に到着した。さうして其意見を彼の父に書いて遣やつた。是は彼がゲツチンゲンで修業してゐる頃ころで、年齒としにすると二十二三の時の事ことである。(つゞく)

八 トライチケ (三)

東西南北どちらの方角を眺めても、彼の眼に映ずるものは悉ことごとく独ドイッ乙ツの敵であつた。彼は魯西亜ロシアを輕蔑した。年来独乙の統

一に反対する 塙^{「オーストリア」}地 利も、彼の憎惡を免^{まぬ}かれなかつた。ミル

トンとシエクスピヤを嘆美しながらも、それらの詩人を有する英^{イギリス}

吉利は、彼から見ると独乙の発展に妨害ある一種の邪魔物^{もの}に過ぎなかつた。彼は到底^{ひと}一戦争しなければ済^すまないと考えた。さうして其戦争から真に強固にして健全な独乙が生れて来るといふ事^{こと}を信じて疑はなかつた。

多数の聴講生を有する彼は、此目的をもつて大学で普^{「ふくく」}国史を講じ出した。ごたくした小邦はみんな取り潰^{つぶ}してしまはなければならぬといふ彼の本意は、此^{この}一事でも窺^{「うかが」}はれた。彼は自ら小邦に生れた事^{こと}を忘れた。彼の父^{ちち}に対する義理も忘れた。彼は父に向つて云つた。

「親子の情合のために自分の信念を枉〔ま〕げる事〔こと〕は、私には何〔ど〕うしても出来ません」

彼は此言葉と共にライプチツヒを去つた。再び招かれて其所〔そこ〕で演説を試みた時〔とき〕、彼は独乙統一のために、焰のやうな熱烈の言辞を二万の聴衆の上に浴〔あび〕せ掛〔か〕けた。無邪氣な彼等は呆然として驚ろいた。

所へビスマークが現はれた。さうしてビスマークは彼の要する理想の人物であつた。ビスマークの時〔とき〕めく普魯西政府は猶〔なお〕の事統一の中心にならねばならなかつた。彼の所謂〔いわゆる〕「国家」とならねばならなかつた。「第一に自由、夫から統一」といふ叫び声を無意味なものとして聞き流した彼は、「第一に国家の権利、夫から国

家」といふ旗幟〔きし〕を無遠慮に押し立てた。さうして其国家は即ち普魯西である。他の小邦は幾多の犠牲を甘んじて、此中央政府の意志と命令に従はなければならないといふのが彼の意見であつた。

「国家の實質とも見倣〔みな〕し得べき「力」を有〔も〕たない小邦が、何で国家こくを代表する事が出来よう」

彼は斯〔こ〕ういつて、多くの小邦を睥睨〔へいげい〕した。其内には彼の故郷のサクソニーも無論ふく含まれてゐた。

千八百六十七年ビスマークの力によつて成就された北独乙の聯合は、此意味から見て、彼の理想をある程度迄現実にしたものに違なかつた。其結果として凡てに課せられたる義務兵役と、其義

務兵役から生ずる驚ろくべき多くの軍隊とは、支配権を有する普^{プロシア}魯西に取つて大いなる力であつた。それを独乙勢力の増進に必要な条件、即ち西方発展策に応用したのが即ち普^{（ふふつ）}仏戦争なのである。

彼の教授を受けた多くの学生は其時従軍した。彼等の一人が熱烈な告別の辞を述べた時、「どんな犠牲を払つても勝て」と云つた彼は、忽ちヒーローとして青年から目されるやうになつた。彼は固^{（もと）}より独乙の勝利を信じて疑はなかつたのである。さうして不思議の沈黙に陥つたかと思ふと、彼は負けた仏蘭西^{（フランス）}に課すべき条件の項目を其間に調べ出した。彼はアルサス、ローレンの歴史を研究した末、此二州は元々独乙のものであつたのだから、戦勝後

は当然旧主の手に帰るべきものだといふ説を発表した。(つゞく)

九 トライチケ(四)

独^{「ドイツ」}乙は勝った。独乙帝国は成立した。彼が十年の間夢^{ゆめ}に迄

見た希望は遂に達せられた。

「統一の星は上^{のぼ}った。其途^{みち}を妨ぐるものは災^{「こうむ」}を蒙れ」

是が彼の言葉であつた。此光輝ある時期に際会しながら、猶^{「なお」}

且^かつ厭世哲学を説くハルトマンの如き^{「ひつきよう」}は畢竟ずるに一種の精神

病者に過ぎないと彼は断言した。其癡意志の肯定は国家として第一の義務であると主張する彼は、ハルトマンによつて復活された

る意志の哲学、即ち宇宙實在の中心点を意志の上に置く哲学によつて大いに動かされたのである。彼は実社界を至極手荒いもの^{てあら}に考へた。仁義博愛は口^{くち}に云ふべくして政治上に行ふべきものでない^かと信じた。斯くして彼はあらゆる人道的及び自由主義の運動に反対したのである。……

自分はトライチケの影響で今度の歐洲戦争が起つたとは云はない。彼の生時にあつてすら、彼はビスマークの顧問でもなければ又助言者でもなかつた。彼の主張とビスマークの実行とは寧ろ偶^{むし}然に一致したのだらう。たとひ彼が鉄血宰相の謳歌者であつたに^{それほど}した所で、謳歌されるビスマークの方では、夫^か程彼の言論に動かされてゐなかつたかも知れない。それにも拘はらず結果から

云へば、彼はビスマークの政治上で断行した事を、彼の学説と言論によつて一々裏書うらがきしたと云つても差支さしつかえないのである。さうして今日の独乙が、社会主義者其他の反抗に關せず、當時の方針を〔そのまま〕基 儘 繼續して、其 極〔そのきよく〕 今度の大乱を引き起したとすれば、思想家としてトライチケの独乙に対する立場も亦自然明瞭〔また〕になつた訳である。

〔これだけ〕 是丈の關係を明かにすると、自分の癖として、又根本問題に立ち返つて、質問おこが起したくなる。

「トライチケの鼓吹〔こすい〕した軍国主義、国家主義は畢竟独乙統一〔ひつきよう〕の爲ではないか。其統一は四圍の圧迫を防ぐためではないか。既に統一が成立し、帝国が成立し、侵略〔おそれ〕の虞なくして独乙が優に存在し

得た暁には撤回すべき性質のものではないか。もし永久に此主義で押し通すとならば、論理上此主義其物に価値がなくてはならない。さうして其価値によつて此主義の存在が保証されなければならない。そんな価値が果して何処どこから出て来るだらうか」

個人の場合でも唯喧嘩に強いのは自慢にならない。「いたずら」ひとに他を傷める丈である。「あや」国と国とも同じ事ことで、単に勝つ見込があるからと云つて、妄りに「みだ」干「かんか」戈を動かされては近所が迷惑する丈である。文明を破壊する以外に何の効果もない。勝つたものは勝つた後で、「あと」其損害を償ふ以上の貢献を、大きな文明に対してしなければならない筈である。少なくとも其心掛がなくてはならない筈である。自分は今の独乙にそれ丈の事ことを仕終せる精神と実力がある

か何うかを危^{あや}ぶまざるを得ないのである。するとトライチケの主張は独乙統一前には生存上有効でもあり必要でもあり合理的^りでもあつて、今の独乙には無効で不必要で不合理なものかも知れないといふ事^{こと}に帰着する。

然しながら彼は云つた。――

「中リアム帝は独乙に祖国を与へたるのみならず、より平衡^{こう}を得たる又より合理的なる支配の下に文明世界^{かい}を置いた。全世界を健全にするは独乙の事業なりと云つた詩人ガイベルの言葉^{ことば}は今に実現せられるだらう」

して見るとトライチケは、独乙が全欧のみならず、全世界を征服する迄、此軍国主義国家主義で押し通す積^{つも}りだつたかも知れない。

然しながら、我々人類が悉く独乙に征服された時、我々はその報酬として独乙から果して何を給与されるのだらう。独乙もトライチケもまづ其所そこから説明してかゝらなければならない。

青空文庫情報

底本：「漱石全集 第十六卷」岩波書店

1995（平成7）年4月19日発行

底本の親本：

「点頭録六」「点頭録七」「点頭録八」「点頭録九」について
は原稿（岩波書店蔵）。

それ以外については「東京朝日新聞」。

掲載日は第一回から第五回までが、1916（大正5）年1月1日、10、12、13、14日である。

初出：「東京朝日新聞」および「大阪朝日新聞」。

「東京朝日新聞」に第一回が1916（大正5）年1月1日に発表された。

最終九回までの掲載日は、同10、12、13、14、17、19、20、21日である。

「大阪朝日新聞」では、1月1日のあと、12日から15日、18日から21日までの九回である。

※ルビのうち亀甲かつこ「」付きのものは「漱石全集」編集部によるもので、現代仮名遣いである。

（例）墻壁《「しようへき」》

※表題およびルビについて、底本の「後記」に次の記載がある（829ページ）。

「表題は原稿および新聞に従ったが、小見出しが同じものについては、「(一)」「(二)」などを補った。新聞は総ルビであるが、適宜削除した。」

入力：砂場清隆

校正：小林繁雄

2003年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

点頭録

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>